



「あまおう」6月の管理



24年6月号

平成24年5月29日
南筑後普及指導センター
JA福岡大城

平成23年度産の生産が終わりました。5月20日現在での実績は以下のとおりです。

<JA全農ふくれん実績>

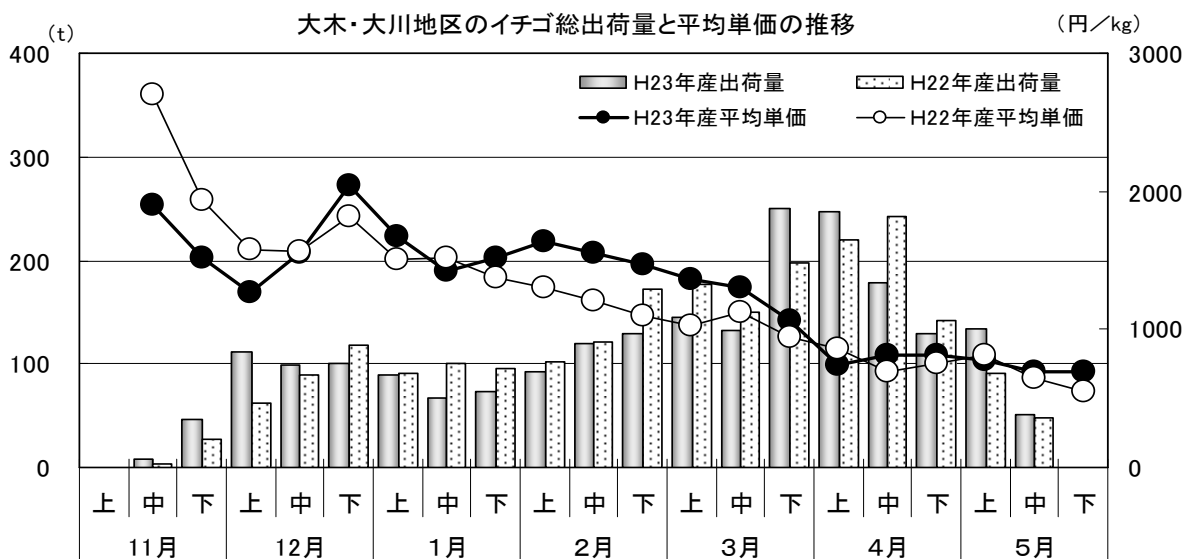
※()内は前年対比

	生産者数	栽培面積	10a 当たり数量	10a 当たり金額
大木地区	89名 (96%)	19.6ha (98%)	4,322kg (101%)	5,204千円 (110%)
大川地区	128名 (100%)	32.4ha (104%)	4,181kg (93%)	5,098千円 (106%)

平成23年度産では、反収は昨年をやや下回る数量でしたが、単価が高かったため、10aあたり金額は前年を6～10%上回る結果となっています。

今作の出荷パターンを振り返ると、①年内は秋の高温のため前進出荷して12月上旬がピークとなり、年末には大玉が非常に少なくなったこと、②2月以降は、日照不足の影響で出荷量が増えず、天気の良い転に伴って3月下旬～4月上旬に大きな出荷ピークを迎えたことが特徴的でした。

また、反収が昨年に比べてやや減少した要因としては、秋期の高温と日照不足による株の充実不足が大きく影響していたと思われます。高温の影響は定植日が早いほど強く受けていたようですので、今作を参考に次年度の作型を検討して下さい。



専用親株の管理

今年の親株は、2月の低温で立ち上がりやや遅かったものの、その後の好天によって生育は回復傾向にあります。しかし、最近の少雨で子苗の発生遅れが見られており、昨年よりも子苗数の確保が遅れているほ場が散見されます。

子苗数の確保が遅れると梅雨に入ってから採苗することとなり、炭そ病に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、炭そ病対策を徹底して下さい。

＜育苗目標＞

- **クラウン径8mm以上の良苗作り**（収量確保）
- **病害虫のない苗作り**（炭そ病、ハダニを本ほに持ち込まない）
- **作型にあわせた苗作り**（まず、作型を決めましょう）

鉢上げ

【さしポット】 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

- 子苗採取前に、必ず、「炭そ病」の予防防除を行う。
- 本葉2～3枚で、3～5cm発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
→本葉4枚以上の苗はうどんこ病、不時出蕾が発生しやすいので、苗が余るようであれば使用しない。
- ワラ被覆床では、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後7日程度は黒寒冷紗（610番）等で遮光する。
- 「あまおう」は活着が遅いため、活着するまでは、薬水程度のかん水（ミストかん水）を1日に数回行う。
- 「炭そ病」対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 曇雨天が続いた直後の晴天日の採苗、鉢上げは活着が悪いので注意する。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷庫内で保存する。（保存期間は3日間まで）

※ 苗の発根促進・活着促進のために
タチガレン液剤 1,000倍（挿し芽採取時 30分間挿し芽浸漬）

【すけポット】

鉢受け作業時期	⇒	5月末まで
切り離し目標時期	⇒	6月15～20日

- 根がこぶ状に発根した苗を、順に鉢受けし、海苔みず等で止める。
- 根が伸びすぎている苗は鉢上げに使用せず、全葉を除去する。また、ランナーが極端に細い子苗も使用しない。
- 降雨などで硬くなった培土は、根つき（根の入り）が悪いので、鉢土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、「炭そ病」の定期的な防除を行う（特に鉢受け作業後）。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 徒長防止のため、子苗への施肥は行わない。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除し、子苗の徒長防止と病虫害発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。
- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃（根づいた頃）を目安に行う。ただし、降雨の日は絶対に行わない。

鉢上げ後の管理

【肥培管理】

充実した苗作りに向けて、過不足のない肥培管理を行うが、「炭そ病」の危険性がある場合は、窒素過多にならない管理を徹底する。

- 活着したら追肥（置き肥）を開始する。
- 活着後、2回程度液肥を施用する（例：OKF1で1,500～2,000倍）。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。

【かん水】

- 「あまおう」は湿害に弱い。過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は朝主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間、濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は、葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【葉かぎ】

- 葉数3. 5～4枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。
- 葉かぎは1回につき2枚までにする。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に「炭そ病」の防除を行う。

【病害虫防除】

<炭そ病>

「炭そ病」は、病原菌が雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病する。

- 炭そ病は濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。
- 定期的な防除・降雨前後の防除に心がける（別紙の「炭そ病」、「ダニ」を中心とした薬剤散布例を参照）。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔は確保する）。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に梅雨期）。

<うどんこ病>

うどんこ病は、病斑のある葉を入庫または定植しないことが重要。

- うどんこ病の病状が進展する梅雨期を中心にしっかりと薬剤防除を行う。
- うどんこ病に感染している苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで感染した葉が取り除かれてから、入庫または定植に使用する。
(入庫時や定植時に病徴のある葉が除去できているようにする。)

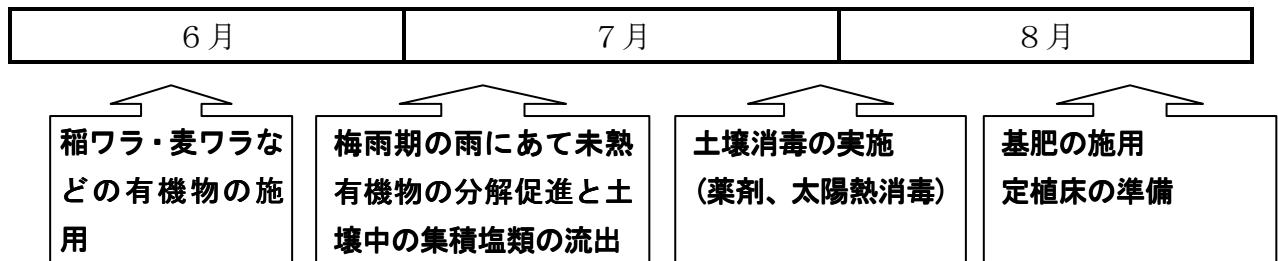
【土作り・土壌消毒】

● 有機物の施用

- 前作の栽培で消耗された土壌有機物の補給が目的になる。（地力の回復）
- イチゴ栽培で消耗する土壌有機物は堆肥約 2 t / 10 a に相当。
- 稲ワラ、麦ワラ、家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。（分解促進、塩類溶脱のため）

● 土壌消毒

- 薬剤による消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。



農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！